

PMMをあらためて考える

マイケル・ライアン（コロンビア大学）

訳：高木眞佐子（杏林大学 准教授）

私は北アメリカにある大きな研究図書館で仕事をしていますが、皆様の中にもこの研究図書館に親しまれる方がいらっしゃるはずですが、私がこんな風に話し出すのは「私の」図書館を皆様に紹介するためですが、同時にわれわれが収蔵資料の大半—まさに圧倒的の大部分—を20世紀になって入手し、しかもその大半を第二次世界大戦後になってから入手した事実の皆様に留意していただきたい、そんな目的もあるからです。北アメリカでも高等教育は戦後期が—ごく最近まで—猛烈で前例のない成長をとげた期間でした。北アメリカにあるこの研究図書館も、高等教育が戦後期に急激な成長を遂げた事実由来する利益を大いに享受しています。

この北米研究図書館の急速に拡大したまさにその開始時点で*Printing and the Mind of Man*（邦訳：『西洋をきずいた書物』雄松堂出版）が姿を現した(以降 PMMと略す)のは偶然ではありません。西洋では20世紀にいくどかの破壊的な戦乱と暴力と、注目にあたいする楽観論と復活が続きましたが、それらと軌を一にして、PMMと研究図書館の両方がうまれています。PMMはどんな尺度をあてはめてみても他に例をみない取り組みでした。学術関係者でも学芸員でもなく、職業的な組織、商業団体—英国の印刷業者ら—が組織した野心的な出品物としてPMMが世界に登場した事実、今になって思えば信じられないような事実を考察してみましょう。—振り返ってみればわれわれはこうした事象をはぐくんだ文化から、今やきわめて遠くにあり、信じられないような思いがするのですが、PMMは生を受けた時点では印刷業者と印刷取引業者向けの一介の宣伝でした。—哲学者、ライター、科学者、政治家に向けた宣伝ではなかったし、まして出版業者、書籍販売業者あての宣伝どころではありませんでした。印刷業者、印刷活動がそれまでの500年内外の間世界にもたらしていたものの実物宣伝の延長線上に位置していたのです。学術関連施設や文化施設がPMMの実例を我が物にとりいれたのは後になってからにすぎませんが、そうした施設でPMMは成長し、現在の膨大な量と権威を現出しています。

これ以外にも想起すべき点があります。最後の世界大戦のあからさまな形跡がいくつもあいかわらずどこでも目にできたイギリス、ロンドンでPMMが創出された事実です。依然として比較的貧しかったイギリスであり、自分のアパートの部屋での数分間の給湯に大きなペニー硬貨を計量器ボックスにあいかわらず落とし込まなければならなかったイギリスでした。そこは労働紛争、階級闘争で依然引き裂かれていたイギリスです。ひどく安い手当たり次第の食事（フィッシュ・アンド・チップス）ですませていた、肉体労働のイギリスでした。素朴で簡素で、歯を食いしばってそれに耐え、ただ生きて行くだけで精一杯のイギリスでした。とはいえ1960年代の活気あるポップ・カルチャーの革命を孵化させるのに忙殺されていたイギリス、ロンドンでもありました。このポップ・カルチャー革命はPMM同様、イギリスの光景を喜び溢れるものに変させるため一役かうことになります。

PMMは、西洋での書物収集、書籍関連の玄人の世界に直ちにある影響をもたらしました。「収蔵すべき書物」の領域が劇的に拡大したのです。それ以前は西洋文学、ファイン・プリンティング（美しい印刷）が書籍関連の玄人を長い間支配していましたが、PMMはそうした分野から科学、医学、法学、哲学、歴史学、宗教学、そして学問全般に関わる偉大な伝統へと扉を開きました。書籍の内容は書籍のスタイルと同じほど重要でなければならないとするPMMの主張に

は説得力がありました。PMMは本文のどんな内容を基準として書籍を求めるべきかについて、依然より基準をはるかに拡大し多様化し、新しい基準を書籍収蔵者にもたらしめました。これに加えて、PMMにはちょうど北アメリカの書籍収蔵者—団体、個人を問わず—が大がかりに市場に参入しつつあったまさにその時点に古書籍取引を改めて活性化する効果がありました。雄松堂の新田氏がこの重要な業績を日本語で利用できるようにした先見の明があったということは、書籍関連の玄人、企業経営者、書物販売業者として彼には永続的な信用があるということです。

PMMはアメリカでは地元で育まれたある伝統と交錯しており、この伝統がPMMをヨーロッパから少しばかり切り離しています。つまり「名著」(「グレート・ブックス」)の伝統です。グレート・ブックスという用語で私は古代から近世までの西洋で古典となっている文学、文書を意味しています。ヨーロッパではこれら名著に特に注意を払っていませんでした。これら名著はヨーロッパ文化固有の業績だったからです。アメリカにはアメリカの「例外主義」(エクセプションナリズム)の伝統—つまりアメリカはヨーロッパまたヨーロッパ以外の世界のどの地域とも違い、切り離されているというアメリカがみずからにいただいているイメージ—、またみずからの文化遺産はみずからうみだしたいという欲望があり、「名著」と学校での履修課程における「グレート・ブックス」は20世紀まで国外関連の領域にとどまっていた。ウィルソン大統領が第一次世界大戦末に合衆国の部隊がフランスで戦うよう誓約して以来、「例外的(エクセプションナル)な」アメリカをヨーロッパにいるその生みの親たちとあらためて結びつけることは緊急な優先課題になりました。兵士、文官に同様に、われわれの相続した文化遺産はわれわれに共通していて、われわれはその守護者でもあると証明し、われわれと文化遺産を結び付けなおしたのです。アメリカの兵士たちがみずからの命をフランドル地方の戦野で危険にさらすことを期待されていたならば、国外の軍事行動予定に仕えるのではなく、自分自身のさまざまな伝統・価値にみられる何か根本的なものを保護し、はくくむためにそうせねばならないのだと知る必要があったからです。

こうして「グレート・ブックス」を履修課目として提供するカレッジや総合大学がアメリカ全土に現われはじめ、この課目ゆえにアメリカはあらためて西洋文化の伝統にしっかりと身をおきなめました。この面での最高位は私の所属する期間コロンビア大学にあり、この大学がアメリカでは最初にそうしたカリキュラムを創りだしました。このカリキュラムは「グレート・ブックス」ないしは「西洋文明」ではなく「現代文明」(コンテンポラリー・シビリゼーション)と名づけられました。現代はいかにして西洋の過去の多様な富をさまざまな風に具現しているか示すことを強調したからです。「現代文明」もしくはコロンビア大学では頭文字を取ってCCと呼んでいますが、それはコロンビア大学を卒業する学生誰もが必修とするカリキュラムだと指摘できるのは私にとっては喜びにほかなりません。

西洋文明での偉大な業績に関心をいただいたのはカレッジと総合大学に限りませんでした。読書会、成人教育プログラム、出版ベンチャーの出現は1930年代にはじまりますが、今日にいたるまで続き、すべてが「グレート・ブックス」を推進しています。シカゴ大学学長のロバート・メイナード・ハッチンス、この大学の法学部の同僚モーティマー・アドラーがうみだした名著の大衆の流行はまだ今日でも見てとれます。名著は文化的に飢えたある国民にとってのひとつの聖典となり、国民の飢えを癒すべく設計した一群の商業生産物になりました。つまり、さまざまな集成(アンソロジー) 概論(コンペンディウム) 参考資料(レファレンス)などです。実のところパトラー図書館、まさに私が仕事をしている図書館自体が合衆国の名著流行のひとつの遺物です。この図書館は1934年、ちょうどハッチンスとアドラーが自分たちの計画にとり

かかりつつある時期に開館し、図書館の帯状の外壁に、テキストがPMM内に見られる少なからぬ人間の名前を刻んであります。つまりホメロスからゲーテまで。

私がこの話を披瀝するにあたってのポイントは単純です。それはすでにPMMを受け入れる素地もあり、PMMを熱望してもいた事実を背景として、PMMがアメリカに生まれた事実です。PMMは西洋の美術、文学、哲学、科学の偉大な伝統とみずからの結びつきをあらためて主張することを熱望している自信があり、楽観的な国民から反響をうまくまねきました。あらかじめ存在していた感情と信念のある大いなる貯水池を活用しました。

しかしこれは50年以上も前の話でした。今日どのぐらいの評価に耐える力がPMMにはあるのでしょうか？ まだ我々の心に訴えかけてくるのでしょうか？ 過去に由来する題名と遺物の長い一覧表以外に、私たちに提供するものがあるのでしょうか？ つまりなぜ私たちはPMMに関心をいだかねばならないのでしょうか？

確かに21世紀初頭という見晴らしのきく地点からみれば、PMMは不合理とまではいわなくとも奇妙に偏狭であるかに映っています。西洋がみずからを異例かつ勝ち誇っているとあいかわらずみなせた時期の一瞬の名残りに映ります。私たちはそのときよりもはるかに小さく、もっと多様になって、もっと多くの言語を使うようになっている世界に生きています。この世界にあってアジア、アフリカのどの文学も伝統も、ヨーロッパとアメリカ大陸のそれらと同じくらい親しみやすくなっています。貿易、旅行、メディアのグローバル化があいまって、とどのつまりPMMのように西洋に限ってそれ以外の地域を排除する企画を思い浮かべることさえ難しくなっています。今日こうして皆様の前に立ちつつアジア研究、書籍収集にいそまれているかたがたを聴衆としてPMMについて語っている一介の西洋文明の代表者として、私自身、この事実を痛切に感じている次第です。そうである以上、私が今日この話をするにあたってはたすべきは、ある基礎的な疑問への解答を試みることです。すなわちPMMの中で生き残っているのは何か、世を後にしたのは何かという基礎的な疑問で、今日話せよと依頼されたPMMの4つの項目をプリズムとする分析をとおして、それを試みようと思っています。その4項目とはデカルト、マルクス、フロイト、リンカーンの4者です。400以上もある項目からの4つですから、皆さんもそう認められるようにサンプルとしてはいかにも小さい。しかし、それでもこの4項目をとおしPMMについて皆様も関心を抱かれ、価値を持つ一般的なポイントを幾つか提示することは叶うだろう、そう希望している次第です。

PMM中の項目は大半が時の経過に今までよく耐えてきましたが、現在までにそれほど長くもたなかった項目もあります。400以上のタイトルという作品群ですからこれもことによると避けようがなかったかもしれません。そうである以上私たちがスノリ・ストゥルルソン、ヒエロニムス・ブルンシュヴィヒ、マルティン・コルテス、ルドルフ・カメラリウスが誰なのか聞き覚えがなくても許されます。しかしこれは19世紀・20世紀に印刷された書籍に特例的に限った事例で、当時は主にイギリス人からなる委員会の関心が今より狭く、偏見もはっきりしていました。この委員会が今日PMMの内容を選んでいればロバート・ライクスないしジョージ・ラヴレス、ジョン・ロバート・シーリー、フレデリック・モートン・イーデン、ジョージ・ケイリー、あるいはフレデリック・ガウランド・ホプキンズは— 無名の人物を挙げるなら— 選から洩れていだろうとするまでの自信は私にはありません。といっても、イギリス人はいかにもイギリス人らしいという事実には寛大たるべきです。これに反し項目内容のテキストは教師然の

文章で、コンパクトにまとめた体裁という与件を考えにいれると、全般的に堅実かつ立派です。

私に充てられている4書籍は、いずれも世界文学の集成に長い間生き残るはずの主要作です。2書籍は内容がまさに短く—デカルトとリンカーンのそれです—、リンカーンはページ数を総計してもわずか4ページです。他の2書籍はまさに大部で—『夢判断』と『資本論』—『資本論』3巻は、各巻とも相当大部です。3書籍はいずれも 科学の歴史における主要な声明であると書籍内部で自己喧伝しましたが、反面リンカーンの作はより規模も大きく時間もかけた奉献的に正式な強調を意図したのみでした。著者2名は 名目上はキリスト教徒で—デカルトとリンカーン、残り2名は名目上はユダヤ人—マルクスとフロイト— でした。「名目上は」としたのは、この4者にはみずからの宗教的側面、民族的側面に強い愛着をいただいていたと知られている人物がひとりもないからです。2名は人間をみずからの 世界を構築する一介の活動的な行為者であるとみなしました—デカルトとリンカーン—です。また他の2名は、人間はみずからの統制のかなたにある心理・社会的なさまざまな力、歴史に由来するさまざまな力に支配されているとみなしました—マルクス、そしてフロイト—です。2書籍は亡命中に執筆されました—『方法序説』と『資本論』—です。残る2書籍は著者それぞれ文化の中心で書きあげました—ゲティスバーグ演説と『夢判断』—です。3書籍は、われわれが目にしてこの世界があるがままの世界ではない事実を科学の研究として論じました。とりもなおさずリンカーンだけは、当時そうであったままの世界の不気味さに直面しそれについて省察する羽目になったわけです。マルクスとフロイトは人間と自然に関する隠されたもの、見えないものに光をあてつつ、また人間と自然の秘密を暴露しつつみずからを古典的啓蒙主義の人物とみなしました。もちろん デカルトの投影が今まで一番長いわけですが、マルクスとフロイトが20世紀に与えた群を抜く影響についてあえて異を唱える者がいるとも思いません。両者の影響力の存在は苦悩したあの世紀をとおしいたるところにみられました。実際、1950、60年代には個人の解放、政治的解放に関しさまざまな理論がマルクスとフロイトの洞察を組みあわせて、人間と社会が潜めている可能性についての複数の理論を一分野に統一しようと試みしました。さらに、これら4タイトルの書籍はどれも印刷技法の歴史では一里塚のひとつにはなっていません。いずれも粗末で簡素な、売るのが簡単な書籍として経済的かつ効率的に出版されました。フランス人が「ジャンセニスト的」と呼んでいる書籍です。つまり、外からみると簡素で飾っていませんが内面は豊かかつさまざまな要素を含んでいる書籍です。

「デカルトは思う、デカルトに実存あり」

奇妙な話ですが PMM 中、ルネ・デカルトの項目だけは「コギト・エルゴ・スム」と冠しています。奇妙だというわけは、もちろん、その項目で扱っているデカルトの業績、つまり 理性を正しくみちびき、あらゆる科学（訳注：学問とする邦訳もある）で真実（訳注：真理とする邦訳もある）を求めるための方法の序説をデカルトはフランス語で書いているからです。となるとなぜこんなラテン語訳を掲げたのでしょうか。「コギト・エルゴ・スム」という言い回しは、ある種のマントラ（真言）としての機能とでもいうべきものをあらかじめ内含していて、引き合いにだせば、この項目の要点をすでに要約していることになるからだろうとしか私には推測できません。これは当該論稿のまさに末文に現われている点です。「科学・哲学の現代思想はすべて」この『序説』にみられる「中心的命題に派生している」と私たちが知らされる箇所です。

PMMのこの項目が指摘した内容以上にはほとんどデカルトについて知るところがないなら、この項目の内容からデカルトは西洋の科学史で一つの指導的位置を占めていたと(当を得て)推論するはずですし、『方法序説』は科学的な方法の概念に関する正式な一学術論文だったと(不当に)推論してしまうはず。この事実が1960年代初期にはデカルトとその短い業績をどんなふうで紹介していたかを示しています。デカルト、ベーコン、ガリレオそしてほかの選ばれた何人かがアイザック・ニュートンと現代科学の誕生にいたるまでのかくも多くの足がかりとしていくつかある標準的な科学史に登場しました。デカルトの『方法序説』とフランス・ベーコンの『ノヴム・オルガヌム』(*Novum Organum*)はしばしばペアにされて、科学的認識を追及する上で基盤となっているテキストとされました。といっても、ニュートンは「自分は仮説をたてなかった」と有名な例の主張を掲げ、自分と自分の業績とデカルトとの間に無遠慮に距離を保ちつづけていました。なぜでしょう？ここで、私のデカルトについての話に修正を加える必要があります。

21世紀という有利な立場から眺めると『方法序説』はまったく公式の専門書としてしか読めません。実際にはデカルトが何度も何度も念を押しているように、そのような書物でないように故意に企図した書物です。なぜかといえば、タイトルにほめかしているその方法論は、科学の表象と深い関係を持っているからです。それは科学者の用いる実際の工程に関係するだけでなく、この世に現われる時に用いる様式やスタイルと言った点にも関係するのです。この書物は科学史における一里塚というだけでなく、修辞学の歴史においても一里塚なのです。論じさせていただければ、『方法序説』は修辞や歴史に脅かされている権威的な支配構造の中でどうやって真実と知識を伝達するのかという秀逸なケース・スタディなのです。デカルトは婉曲に何箇所かで、自分は自身の科学研究の果実を含む大部の書物を刊行する予定をかつて持っていたこと、しかし以前にそれをしたことがある同僚の身にどのようなことが起こったのかを知ってそれを断念したと語っています。デカルトを、そして実のところデカルトの経歴の大部分を覆う黒い影は、ガリレオの裁判と投獄によってもたらされたものなのです。デカルトはガリレオの運命が自分のものになってはならないと心配していたのでした。かくして『方法序説』はデカルト自身がカトリック教会に警告しつつも、教会なしで自分が何をするつもりなのかを知識界にしらしめようとする戦略的な行動となりました。

『方法序説』における欺くための策略とは、どのようなものだったのでしょうか？それは3つの部分から成り立っています。まず、『方法序説』はフランス語で書かれておりラテン語では書かれていないという点。すなわちこれは知識人というよりはむしろ、地方の一般大衆に向けられたものです。仮にこれが大げさで形式ばったラテン語で書かれていたら、検察官たちが驚いていたかもしれませぬ。ヨーロッパの多くの人々がそれを読むことができただけだからです。しかしフランス語では？ともかく誰がフランス語など読むものでしょうか？それに加え、一般庶民の言葉では重要なことは何も書かれないのですから。

次に、『方法序説』はその提示の仕方に特徴があります。それは論理と方法に関する1冊の公式の専門書ではなく、デカルト自身が自分の知的発展をとおして私たちをいざなってくれる非公式で自伝的なスケッチとしてわれわれの目の前にひろがります。同時にデカルトは、自分が発見したことの妥当性に関するいかなる主張もしません。それはあたかもコーヒーを飲みながらデカルトが自分の人生や、何を学んだかについて語り、彼について行って実例が何かを見せてもらう—もしくは見せてもらわないことにする—かは、私たちに任せられている、といった

風なのです。この『序説』全体を通じ、著述家とその意図にはどこかわれわれを安心させてくれる一種の無頓着さを感じます。

最後、つまり第3番目としてデカルトは仮定のものとしてしまう技巧があって、ニュートンはこれに大いに悩みました。まちがいをなく論議を招くこと、現実に関わりながら自分にも面倒をもたらさねないことを表現する時には、デカルトはいつも単純に仮定法で表現します。そうである以上、この世界を物質と外延だけの見方で理解する彼の根源的な理解、これも一介の物質主義者、無神論者というレッテルを彼にはりつけていた理解ですが、それもひとつの思考実験の形式で叙述している、要するにこんな風に言おうというわけです。「絶対の神のはずが実際に世界をこんな風に創りだしたと想像してみましょう。もとより神はそんなことはしませんでしたが、まずはとりあえずそうだったと想像し、その事実がわれわれをどこに導くか、みてみましょう」。仮定におくというやり方で、仮定法、条件法で思考するのです。そうすることが、神学者いずれもの領域を侵さないでいわゆる科学について語る上でデカルトにとって死活的に重要でした。こうすることが、きわめて根源的なひとつの課題—つまり精神のない物質的なひとつの宇宙が論理として何を帰結するかを考えだすという課題—を追求する自由をデカルトにもたらしました。

デカルトはラテン語ではなくフランス語で「我思うゆえに我あり」と記しました。有名になってあまりあるこの言い方が、デカルトにとっては思考するひとつの存在としての人間の本質を設定しています。思想、知的営み、それを精神で営むこと。この3つが人間のみに関係している特性（固有性）でした。人間を別にすると生を持つどんな存在も—いもりやヒキガエルから犬、馬、野うさぎにいたるまで—自動機械(automatons)、機械として物質の延長線上にある行動する存在に過ぎませんでした。それではデカルトはこのように極端な立場をなぜ取るようになったのでしょうか。デカルトは何をやろうとしていたのでしょうか？ デカルトの悪名高きまでの精密な二元論はまた、形而上学でのひとつの術策でもありました。この二元論は私たちを取り巻いているこの世界を、科学者たちが研究するのに適切になるように、しかも同時に神学者いずれもが自分たちだけの活動範囲を保つこともめつめつ、切り離すひとつの手法でした。科学は精神ではなく物質を研究しました。科学者は誰も、精神またすべて心に関する事柄は司祭総体に任せました。こうした分野に科学は干渉しようとしませんでした。科学に由来する畏れは宗教にはなかったのです。とりもなおさず、宗教に関するどんな側面についても科学は何ら、主張をしていませんでした。

重要なのはこの薄い小論文が、デカルトが公表しても論議をまねかずにすむだろうと考えていた3部の科学的業績のひとつの序論の役割を現実果たしたことです。ここに挙げた3部というのは、デカルトの光学、気象学、幾何学です。そしてこの序論があればこそ、デカルトみずからの発見いずれについても、彼のさりげなく自伝的な研究の仕方が警戒心を和らげるものになっています。デカルトはこの小論文ではしばしば自分をいきいきと描き、どうやって描くかを、ずるくとはいわないまでもうまく計算しています。だからこそただ単に世間にいる青年の一人として自己紹介しています。「わたしとしては、自分の精神が、どんな点でも普通の人より完全だなどと思ったことはない。それどころか、ほかの人たちと同じくらい頭の回転が速く、想像力がくっきりと鮮明で、豊かで鮮やかな記憶力もちたいと、しばしば願ったほどだ。」(訳注：谷川多佳子訳、岩波文庫)この箇所ですぐ続く段落では、つきがあったからこそとりわけ実りの多い方針を選択でき、それを取り入れて認識を自分なりに探求できたと、読者に語っています。たしかにデカルトは、重要であると自分が信じることを少なからず発見していたわけですが、それらが重要であると判断するのはつまるところ他者次第です。デカルトはひとり

暮らしつつ、真実（訳注：真である命題）を求め、人類に役に立つことを果たそうとしていた単なる一介の哲学者なのです。

この『序説』は、科学と科学者の自己紹介の歴史におけるひとつの画期的なできごとであることに加え、今ではそれとは違う遺産もひとつ残していたとみなされています。C.P.スノウのいう「二つの文化」です。すなわち、ひとつは科学という文化、もうひとつは歴史と人文科学です。デカルトは確かであることと、確実な思考の原則に関する自分の探求を詳しく説明しながら、学校・書籍・他の人々からそれまでに学んでいたことそれぞれに事実上、文句をつけて軽くみていました。そうした源泉からえた全ての知識は単に対立しあう意見の集合体に過ぎませんでした。確かに詩と文学とは面白く心優しいものですが、真の知識の飢えた魂を満たすためのものを何も提供しないのです。後者、つまり真の知識は自然そのものを観察することによってできた明確な演繹法からきています。古典文学研究は私たちに意見や斬新な考えをもたらしてくれますが、一番よくとも少なくともも娯楽的です。しかしPMMの項目がこれらふたつの文化が分かれたことを明白に肯定して認めているというのは面白い事実です。「彼が起こした大革命は、知識がもし価値をもつとしたら聡明でなければならず、学識ではないという原理（中世の時代に失われた）を彼が繰り返し主張していることで用意に理解できるはずである。」高等教育である以上、ましてこの原則が当を得ています！

デカルトについての私の意見を終わらせるにあたり最後に述べておきますが、デカルトがフランス人に残したほど、ある個人が単独でそのDNAを自国人の国民としての性格に重々しく留めた人物はこれまでにまず一人もいないと加えておきたいと思います。デカルトが人間は一個の考える存在であること、思考が優越していること、人間の主要な属性である、明晰で完結で厳密に考えることの絶対的必要性を強調した事実が、さまざまなやり方で現在のこの日までフランス文化の発展を方向付けてきました。もっとも、このデカルト風の考えの長い支配も終わりを迎えるかも知れないという兆候がみられています。今年の夏のニューヨーク・タイムズ紙の報道によると、フランスの新大統領、ニコラ・サルコジは考えよとの衝動にあらがおうと、自国民に力説してきたとのこと。サルコジ大統領はこう説きました。「フランスは考える国家である。われわれがひとつの理論に身を置いておくとする思想はほとんどみられない。われわれの書庫にはこれから何世紀にもわたって語る材料は充分にある。だからこそ私はあなたたちにこういわせてもらいたい。もう充分に考えてきた。さ、腕をまくろう。」この言葉にたいしては、フランス人の同僚に代わって私はこう応じます。さあ、バリケードを築きましょう。

「資本論—誰にとっての聖書か？」

PMMのマルクスの『資本論』の項目は「あの新宗教」というタイトルです。この項目を書いた著者が、ほかの項目でこれほど大胆に自分の偏見をはっきり披瀝することはほとんどありませんでしたが、そのうちのひとつがこの項目です。この著者がサブ・タイトルをつけていれば無論、「共産主義にとっての唯一の聖書」としてはいたはず。1950、60年代にマルクスとマルクス主義者をこんな風にみなすことがよくあったわけではありません。しかしこれでは『資本論』を検討する枠組みとしてはひどく侮蔑的です。その時までにはマルクス、あるいはマルクス主義が科学研究ないし、歴史の隠されている過程にもたらしていたかもしれない主張をいずれも無視しているだけでなく、両者、つまりマルクスとマルクス主義をそれらがあれほど激しく戦ったまさに対象そのもの、つまり宗教、「大衆にとっての」恥ずべき「あの阿片剤」と一体化させています。宗教と戦ってきた『資本論』がどうして一つの聖書たりうるのでしょうか。

『資本論』は、マルクスの後半生の故郷になったロンドンでの歳月の唯一の結実でした。マルクスはその政治的急進主義ゆえヨーロッパ大陸全域でペルソナ・ノン・グラータ（好ましからぬ人物）とされていて、その後、1850年、イギリスに避難場所を見いだしました。イギリスでは積年の友人で資金面の後援を仰いでいたフレデリック・エンゲルスと再会。国外での急進的政治運動にロンドンの新たな根拠地から加わりつづけましたが、マルクスの業績は現実には政治的行動主義の粗野かつ混乱する世界の外に位置しました。マルクスは自分を駆りたて励ましつづけるエンゲルスとともに、研究すること、著述することに注目を移し、その成果は『資本論』として実ることになります。大英博物館の大規模なあの円形読書室で、マルクスはイギリスの経済学者、歴史家の業績の上に努力を傾注、新聞や定期刊行物の過去のファイルを通読し、政府の各種統計、報告書に没頭し、自分の研究計画用に情報を収集した件で進行していた裁判に関連し法廷の記録を徹底的に探しました。われわれの知るここでのマルクスの肖像は神がかった着想に狂喜しつつ、聖典を著述している一人の予言者の肖像ではありません。むしろ学問のためにハード・ワークにいそしむ、刻苦精励する学術関係者のおもむきです。マルクスは大英博物館で過ごした時間は「無駄な骨折り」（ドレックヴェルケ）だったと触れ舌打ちしていました。

マルクスはどんな研究計画をたてていたのでしょうか？ 『資本論』とはなんだったのでしょうか？ 『資本論』は少なくともイギリスでの産業資本主義の起源、影響の余すところなき歴史と分析です。歴史学、人類学、哲学、そして論争を結合した浩瀚で、内容が膨れ上がり、落ち着きを欠いた業績です。それ以前にもそれ以降現在までも、これに充分匹敵する業績は一切なく、イギリスの19世紀社会に関心をいだく者なら誰にとっても、基本的な情報源たりつづけています。

マルクスが『資本論』第1巻の手稿を擲筆するには約20年かかりました。ひどく貧困に悩まされ、慢性疾患をかかえ、また予定をたえず先延ばしすることを意に介さない悪癖もあって、それらがマルクスの仕事への集中をいつもまたげていました。マルクスはこの本、この代表作に大いに望みをかけましたが、分厚さからも難解さからも、これを売ろうというのは手ごわい挑戦でしたし、書いた言語—ドイツ語—も読者数が取るに足りないことを保証していたわけです。ドイツ人の誰がなぜ大規模なイギリス研究にわざわざ関心を抱くのでしょうか？ 実際、マルクス本人が、この巻の前書きでそう懸念しています。初版は1,000部を売りつくすのに何年もかかりました。ほとんど注意を払われないまま『資本論』は過去のものになりました。マルクスにはこの第1巻にさらに3巻を加えるプランがありましたが、そのうちのひとつも終えないうちに世を去っています。エンゲルスとマルクスの女婿にはマルクスが残したノートをつなぎあわせ三巻にまとめる任務が残り、実現したのはマルクスが死んで相当経ってのことです。

PMMに含める書籍の選択にあたって『資本論』が選ばれることにはなんの疑いもありませんでした。この本はアイコンとでもいうべき位置を共産主義の歴史に占めているからで、共産主義は1960年代には、世界であいかわらず政治的、軍事的に相当な権威を潜める力であるかに映っていました。あの時代には西洋の目でみるとソ連邦がマルクスと共産主義を完全に所有していました。ベルリンの壁が構築されたのはほんの少し前でしたし、マルクスをブルジョワによる資本主義秩序の終焉を予言する不吉な予言者とみなすこともできました。ましてイギリスの労働運動はあいかわらずきわめて活発でしたし、ひどくマルクス主義を志向していました。1960年代初期には第二次世界大戦とその余波、またソ連邦による東ヨーロッパおよび東ヨーロッパ

以外の世界でもいくつかの地域の征服に、当時の世界はあいかわらず震撼していました。当時の世界には『資本論』、そして『資本論』にみられる世界がみずからを犠牲とするという不気味な予言を、恐れ敬いつつ、眺めるだけの備えがありました。

1980年代後期までにはそうした世界は徐々に姿を消していました。ソ連邦は崩壊、労働紛争は減衰していたし、資本論がイデオロギー面での手段としてどのような権威を潜めていたところで、すべて全体としては失われていました。『資本論』は20世紀末大英博物館でのマルクスのように学術の世界に避難場所を見いだしたわけです。『資本論』は資本論の中に社会・文化・歴史の解釈法、また19世紀における産業資本主義とその影響のきわめて優れた叙述のある集成をみてとった歴史学者、社会学者、そして文芸評論家の保有する資産になりました。2007年の時点で展望すると、マルクスは政治の革命家、ある運動の唯一の指導者としてよりも社会学者、社会・文化の忍耐強い観察者として称えられています。マルクスはみずからが理解し、従わせようと求めた力まさにそのものに作り上げられていました。この力とは歴史です。今日『資本論』がどのようなものになっていようと、聖典ではありません。

『資本論』の残した遺産は複雑で異論を唱えられています。今ではイデオロギー面での耳障りな音色が衰弱しているのでも、『資本論』とは確実に何であるかをみてとることができます。すなわち、『資本論』には19世紀の資本主義のさまざまな過程のみごとで実際に類をもない描写をみてとれます。社会学者たち、文芸評論家たち、哲学者たちは貨幣の性質、富の蓄積、物象化の過程、商品資本主義についてあいかわらず少なからぬ点を見だし、マルクスのみごとな余談ともいふべき点に賞賛を惜しみませんが、ジャーナリスト・マルクスの完璧な描写能力を見逃がすべきではありません。この面ではマルクスに比肩しているのは現実のマルクスの旅行仲間一名だけです。エンゲルスではなく、チャールズ・ディケンズです。『資本論』の典型的なそうした一節に耳を傾けましょう。そうすれば皆様も自分で判断することができます。「第10章 イギリス産業の諸部門」からの一節です（訳注：岩波文庫向坂逸郎訳『資本論』では第2巻第8章第3節“搾取にたいする法的制限を欠くイギリスの産業部門”に所収）。

「1863年6月の最後の週に、すべてのロンドンの日刊新聞は『単なる過度労働からの死亡』という『センセーショナル』な表題の一記事をかかげた。それは、ある非常にりっぱな宮廷用婦人服製造所に働いていて、エリズというやさしい名前の一婦人に搾り上げられたメリ・アン・ウォークリという、20歳の婦人服製造女工の死亡にかんするものだった。しばしば語られた古い物語が、いままた発見されたのであって、これらの娘は平均16時間半、しかし社交季節にはしばしば30時間たえまなく労働し、彼女らの『労働力』がいうことをきかなくなると、時々シェリーやポートワインやコーヒーを与えて、働きつづけさせるといのである。そして、それはちょうど季節の盛りのことだった。輸入したてのイギリス皇太子妃さまのもとで催される誓忠舞踏会のための貴婦人用衣装を、一瞬のあいだに作り上げるという魔術が、必要だった。メリ・アン・ウォークリは、他の60人の娘といっしょに、必要な空気容積のほとんど三分の一も与えない一室に30人ずつはいて、26時間半のあいだ休みなく労働し、夜は、一つの寝室を、さまざまに板壁で仕切った行き詰る穴のような室中で、二人ずつ一つのベッドにはいった。しかもこれは、ロンドンの比較的良い方の婦人服製造所の一つだった。メリ・アン・ウォークリは、金曜日に病気になって日曜日に死んだ。エリズ夫人の驚いたことには、前もって最後の一着を仕上げもしないで。遅ればせに死の床に呼ばれた医師キーズ氏は、『検屍陪審』の前で素直な言葉で証言した、『メリ・アン・ウォークリは、詰め込みすぎた作業室における長い労働時間と、狭すぎる換気の悪い寝室とのために死んだ』と。」（訳注：この箇所は上記岩波文庫向坂逸

郎訳を引用)

聖書? いいえ古き良き19世紀のメロドラマです。

「医師フロイトの夢の世界」

PMM 中フロイトの夢判断の項目の題は単純に「精神分析」です。この項目は1900年に『夢判断』を出版するまでのフロイトの経歴を大いに凝縮し、たくみにスケッチしているとともに、精神分析にとって独創的で影響力の大きいこの業績を短く要約しています。この項目はフロイト自身の判断、とりもなおさずこの業績がフロイトの業績ではもっとも重要な作品だという考えを暗示的に受け容れています。これはフロイトが「精神分析」と呼んだもののフロイト初めての主要な総合的紹介であり、PMM が当を得て留意しているように、フロイトがこれにつづく30余年をかけて苦心して創りだしつづけるいくつかの基礎的概念の大半を含んでいます。PMM も同意しているフロイトの見解によると、『夢判断』は精神分析の根底をなす学術論文です。マルクスの『資本論』と異なり、到達した大作、一生を費やした調査と研究の要約ではありません。むしろ人間とは何かという新たな研究分野全体へのある出発点です。

とはいつても、フロイトはもう若くない時点で『夢判断』を出版しました。熟練し尊敬されている44歳の医師でしたが、医師としてのキャリアは滞っていたようです。フロイトは、獲得するまでもなく任命されて当然と感じていた大学関連の職に、まだあいかわらず任命されていませんでした。しかし、1900年の保守的かつ階層秩序のあるウィーンでは不利を二重にこうむっていました。ひどくキリスト教的な環境のもとでのユダヤ人だったし、まったく新しい科学、人間の心の科学を世界に提供することを主張していたのです。フロイトは世界での自分の科学的名声を高め、もっと有名になることに熱心かつ懸命に努めました。新しいタイプの医学とその実践の創始者としての自分の役割が認識されることを切望しました。フロイトの出版者、フランツ・ドットケはこの新しい科学の出現を新世紀への変わりに一致させることを投資に利用しようと望んでこの本の出現を1900年まで遅らせさせました。この本に対する当初の書評はむしろ肯定的でしたが、大衆からの反応がなかったのでフロイトは大いに落胆しています。初刷りは600部といかにも控えめでしたが、売りきれぬまでにはいくらか時間を要しました。しかしこの業績がフロイトの長くまた成功した経歴の過程で6版を数えた事実については、満足げに記すことができました。

フロイトの基本仮説は、落胆させられるほど単純です。夢は抑圧された願望の充足を表わしているとする仮説です。ただし心に関する一理論の総体がこの短い言い回しに潜在しています。抑圧のメカニズムは無意識の存在を仮定し、無意識が今度は社会一般が認めない願望や欲動(訳注:フロイトの用語)の思い出すことのできない倉庫の役を果たしました。これら願望や欲動は性的接触の欲動はじめ解決されない子供時代の両親との葛藤に由来しています。夢は顕在意識が眠っているとき、いわば意識が消えているとき生じたのです。このことで無意識の中の禁じられている残滓が夢の形をとって現われることができるのです。そうである以上夢は無意識の移ろいやすい内容に由来する精神疾患を診断、治療する上で核心とすべき要素になりました。事実、古典的な精神分析の間にあの女性患者が体を横たえる有名な「分析用の片ひじ長椅子」もこの女性患者が疑似的睡眠をとり、こうしてこの女性患者を悩ませている無意識のままの問題いずれをも意識の中に放つのを助けるフロイトによる試みでした。

フロイトは自分の関連した一連の夢分析での心の基礎的な力動（訳注：フロイトの用語）と設計をレイアウトしましたが、分析した夢の多くは自分の見た夢でした。この事実ゆえに『夢判断』はデカルトの『序説』と同じほど一風変わった本になっています。科学に使えるいい加減な自伝という意味です。ある批評家の言では、聖アウグスティヌスが『告白』と『神の国』を一作品として紹介することを選んでいたように、フロイトが始めから分析者と被分析者としての役割を演じたため、科学に位置する精神分析という主張を問題視させる結果になりました。

PMM が刊行された当時、臨床診療—臨床療法—面でも、医学校での科学的訓練の面でも精神分析の人気と影響は絶頂にありました。イギリスと北アメリカほど確固とした成功をおさめた地域はありません。マルクスどうよう、フロイトもイギリスに迫害からの避難地をみだし、オーストリアがナチス・ドイツに降服する前夜、家族とともにその地に逃亡しました。ロンドンは精神分析運動の事実上の中心地になりました。

しかしそれ以降の歴史がフロイトの夢理論と精神分析に思いやりを示したわけではありません。南アメリカ、ヨーロッパ大陸の一部地域では精神分析セッションはポピュラーでありつづけていますが、アメリカでもイギリスでも一方で認知療法、他方で臨床精神薬理学があるので、臨床診療としてはかげりをみせてきました。これと同じように睡眠生理学を研究している認知療法専門家、神経学者の業績が現在までにフロイトの夢理論の基礎の地位を奪いつづけています。夢というものはフロイトが示したかみえたアプローチ以上に、はるかに多様で複雑なものとして示されつづけています。精神分析内部でも夢の分析は臨床での手続きとしてはとるにたらない部分になってしまいました。今日臨床医用の教科書として『夢判断』に提供する内容はほとんどありません。『夢判断』に向けられている関心とはもっと回顧的なものです。精神分析運動の一歴史資料として、またフロイトの夢とそれらの解釈が紹介しているフロイトという人物についてのじれったい証拠としての関心です。

それにもかかわらず、他の精神医学者より多大なフロイトの影響—そして『夢判断』の影響—は巨大でありつづけています。フロイトの天才は他と尋常ではないこと、独自であること、異常であることへの手掛かりをありふれたもの、日常的なもの、通常のものの中にみることになりました。みずからと葛藤している心というフロイトの力動的モデルが精神医学にとってだけでなく文学、芸術、哲学でも猛烈に重要だという事実は今まで証明されつづけてきました。フロイトがこの『夢判断』とその他の著書で紹介している証拠の多くは、西洋文学に由来しています。ギリシャ悲劇、ダンテ、シェークスピア、ゲーテからで、それゆえフロイトが作家、芸術家、批評家一般に与えた衝撃は今まで相当なもので、しかも発展しつづけている事実は偶然ではありません。モダニズム、超現実主義、そしてその他20世紀美学の潮流はフロイトの影響を強くうかがわせています。フロイトがこの『夢判断』の冒頭に掲げた「天上の神々を動かさざれば冥界を動かさむ」（訳注：新潮文庫、高橋義孝訳）というヴェルギリウスの警句を思い出す人もいます。警句の内容は人間の成長における幼年時代、性の役割にたいするフロイトの特徴となっている強調と同じといえます。夢に関するかぎり、フロイトは少なくともわれわれに生産的な方向を示してくれました。夢はその夢を見ている当人について何かをわれわれに告げてくれる、というフロイトの洞察の基礎が臨床医にたいしてもっている価値が発展しつづけるのは明らかです。精神分析は医学校のカリキュラムに残っていますし、精神科医のトレーニングの決まり切った一部です。フロイトには心と脳の間という争点を回避する傾向がありましたが—神経学者として両者の間に関係があったことを知っていたのです—、それにもかかわらず彼の業績は例えば私が属している機関で積極的に心と脳の間さまざまな問題を

探求しているノーベル賞学者、エリック・カンデルといった人々の興味を引きつけています。

「リンカーン氏の3分間」

私がコメントを求められた4番目のテキストは他の3テキストとはまったく違います。デカルト、マルクス、フロイトは科学史の数章でうまく一括できます。エイブラハム・リンカーンは哲学者でも科学者でもなく政治家だったし、さまざまな価値や指導力を争点としたほどは真理に関心はいたっていませんでした。ほかの3名が誰一人味わうはずのなかったやり方で試練をうけるのがリンカーンの運命でした。南北戦争の戦場での試練です。デカルトが競合・論議するのを敬遠した場所で、リンカーンは敬遠せずそれらと格闘しました。

PMM全体の中ではリンカーンの「ゲティスバーグ演説」だけは、最初に口頭で語りつづいて印刷して世間に発表した小品です。この点はささやかですが重要です。この点がPMMの創始者たちいずれもが文書で証明しようと試みた印刷のもつ力をあざやかに例示しているからです。「ゲティスバーグ演説」だけが、語った言葉を保存し、普及し伝達する能力面での印刷の力をわれわれに示しています。ただ272の語である「ゲティスバーグ演説」はPMM中ではもっとも短い小品ですが、この上ない迫力をもつ小品でもあります。さらに印刷されたゆえにアメリカ史のもつ強力な遺産です。印刷されていないならばリンカーンの言葉は想起されることさえあったでしょうか？

「ゲティスバーグ演説」の項目はこの小品の印刷史を正確に並置しています。新聞数紙がゲティスバーグにいた記者たちが書きとったリンカーンの言葉をいくつか異文として最初に掲載しましたが、記者いずれもテキストを文書で参照していません。もっともAPからの記者ジョゼフ・ギルバートが、リンカーンが見解を披瀝してすぐ後にリンカーンの原稿を少しの間参照する機会があったことは確かに知られています。ただし、リンカーンの原テキストの原稿は現存しません。新聞が掲載した異文いくつかに加えて、後になってリンカーンがさまざまな人々用に、さまざまな目的で作成した4原稿は確かに残っています。しかしこの類のないケースでも、上述4原稿いずれもどの印刷された記事よりも日付は後です。それゆえにPMMの集成中この小品は（訳注：印刷の力を示す）アイコンとでもいうべき位置を占めています。

このゲティスバーグ演説がアメリカ史に潜めもつ権威を理解する上で、その背景には死活的な重要性があります。リンカーンは1863年11月、ペンシルヴァニア州ゲティスバーグまで、この戦争全体をとおしもっとも血なまぐさい戦闘が最近あったばかりのある戦場を死者の魂をとむらいに赴かねばなりません。ゲティスバーグでのあの殺戮は他に例を見ませんでした。1863年7月初旬、数日間（訳注：三日間）という短い間に戦死した兵士は一万を超え、他の兵士も21,000人以上が負傷しました。戦馬7万以上が殺されました。リンカーンが奉獻式のためにこの地を訪れた11月、周りにはあいかわらず死の臭いがただよっていました。死者は戦闘後まもなく、急いで一旦埋葬され、その後この戦場を記念する目的で墓所から掘り出しあらためて埋葬されました。ゲティスバーグの戦慄をフィルムに収めるために急行していた写真家らは一依然として新しい職業でした一、劇的效果を演出するために、掘り出した死体をあらためて並べなおすこともありました。

アメリカ史で「ゲティスバーグ演説」ほど深くまたかつこれほど継続的な衝撃を今まで保ちつづけてきたのは、他に唯一「独立宣言」があるだけで、PMMはそれも含んでいます。事実こ

れら2文書が、アメリカ人の意識であれほど深く共鳴しているのは偶然ではありません。「独立宣言」がリンカーンに直接着想をひらめかせました。「独立宣言」が新国家を樹立する文書であれば「ゲティスバーグ演説」はこの国家のもっとも深刻な危機、アメリカ全州間の戦争のまさにその時点でこの国家をあらためて樹立した文書です。「独立宣言」は入植者のイギリスにたいする叛乱を正当化する抽象的諸原則のある大胆な主張です。この宣言にみられる諸原則でもっとも重要なのは自治原則と人間の絶対的かつ、他に還元できない平等原則です。だからこそリンカーンもそれとなく「独立宣言」をひきあいだして、肅然と演説しました。「われらが父祖は87年前にこの大陸にあらたな国家を生誕させた。自由のもとに懐胎し、人はなべて平等に創られているとする命題に身をささげる国家である」。

ゲティスバーグの戦いは壮大な規模の一悲劇だったものの、あの戦争の転換点でもありました。南部分離主義者の軍事力勢力に対する北軍すなわち連邦軍の主要な勝利では初勝利となりました。しかし、この激突が究極的になにももたらしたかは、明瞭になりませんでした。これはリンカーンみずから顕示的に明らかにしている点です。「今や、われわれは一大内戦で戦いを交わしている。あの国家、あのよう懐胎し、あのよう身をささげる国家いずれもが長い間持続できるかの試練をうけている。しかしリンカーンがどのようにこの不確実性を言葉にしたのか御留意ください。この「内戦」で危機に瀕しているのはある連邦国家ではなく、ある方式、諸原則に基づいて樹立した特殊な連邦国家です。争点となっていたのはこのことです。「自由のもとに懐胎し、人はなべて平等に創られているとする命題に身をささげる」一国家を維持することが可能でさえあるかどうかでした。ゲティスバーグの戦慄はリンカーンに究極的な挑戦を喚起しました。アメリカの本質そのものに浸透しているあれら原則すべての生存能力でした。この事実を国家としての大いなる挑戦にするところにリンカーンの天才がありました。戦場における勝利ではなく、建国原則としてのこれらの原則を有効にするという挑戦です。

リンカーンは11月の奉獻諸式でも、最も重要な演説者ではありませんでした。最重要演説者の榮譽を手にしたのは雄弁家そして政治家として名高かったエドワード・エヴェレットです。あの当時、エヴェレットは大衆を前にしての演説家としてすさまじい尊敬をほしいままにしている、奉獻式はいずれも、開催時間を注意深く計画しエヴェレットの多忙な予定に組みこまざるをえませんでした—リンカーンの予定にあわせたわけではありません。エヴェレットが演説を承諾したあとで、リンカーンはほとんど後からつけ加えたかのようにはじめに招かれたわけです。

エヴェレットの基調演説とリンカーンの述べた短い所見のなす対照以上に隔たりの大きい対照を想像することは難しいでしょう。エヴェレットの演説は2時間以上にわたり、ゲティスバーグの戦いについてはつぶさに語った経過もありました。予期どおりの演説でした。つまり、みずからの命をささげた将校・兵士賛辞を呈しています。勝者を称え敗者を嘲弄しました。よく練っており、情報にもとづき、思慮深く、理解しやすく網羅的な演説でした。話によると、エヴェレットはよくとおる甘い声の持ち主だったそうです。つまり耳にするだけでも、まれな楽しみをもたらす演説家でした。エヴェレットとは対照的に、リンカーンは甲高く、まるできんでいるかの声の持ち主でした。リンカーンは見解を何点か3分程つづけましたが、この戦闘の細部、戦闘員名、あるいはこれら以外にも、後になってリンカーンの文書にある特殊なできごとと結びつけるようになることにはまったく言及していません。むしろリンカーンの見解は抽象的で、ほとんどトランセンデンタル、つまり日常経験を越えた内容でした。エヴェレットが腐心して書きあげていたほとんど一切を完全に無視したわけです。ゲティスバーグの戦いを耳

にできる個所はなかったのです。さらに、むろんすべての対照で最大の対照になっているのは、エヴェレットのスピーチがはるか前から忘却されたままなのに、リンカーンのそれは、国民の集団としての記憶の一部になっている事実です。

リンカーンの演説は簡潔かつ精密で、よく考慮してあり、普遍的な到達範囲をもつ、修辞の傑作たりつづけています。この演説を誘発したあの契機を文字どおり超越し、倫理的かつ政治的コミットメントの空間での一切を支配している普遍的根底をみだしています。兵士らの死が犠牲となったことは認めているものの、死せる兵士たちへの想いとらわれつづけていません。国民のこのうえなく暗黒の時にあって、悲しい出来事の中でもこの上なく悲しいこの出来事に際し、リンカーンは、どの取り組みにもまして、もっともさしせまった取り組みへの挑戦を聴衆に求めるのです。この国家がその起源に理想としていたイメージにもとづいてこの国家をあらためて樹立する必要という取り組みです。そうだ。われわれはここゲティスバーグで死者に追悼をささげつつあるかもしれない。しかしわれわれは現実に、追悼以上のものをささげねばならない。「むしろ、われわれの前に残された偉大なる任務に身をささげるためにわれわれはここにいる—あれら名誉ある死者らがわれわれに託した任務だ。そしてこの任務ゆえ、死者らが最後にできる限りの範囲で身をささげた大義へのわれわれの献身は増大した—あれらの死者をむなしく死なしめたとしてはならぬと、われわれが深く決意する任務だ—この国家をして神のもとで自由のあらたなる誕生をもたせしめる任務だ—そして国民の手による、国民のための国民の政府をして地上から姿を消せしめさせぬ任務だ」。

アメリカ史の流れをあらためて形づくるため以外の何物のためではなく、リンカーンはみずからの雄弁の相当の技巧を利用しました。みずからの世代、それにつづく世代にこの新たなアメリカの実験を読みとるための新たなレンズを一組もたらしめました。リンカーンはそれとなく独立宣言にさかのぼりつつ、アメリカという共和国は平等と自治に依拠している事実をわれわれに告げました。平等と自治はアメリカの建国の2原則であり、各世代の市民はこの2原則の保持を目的とすべきです。これら2原則は、現在まで今度はわれわれがみずからを測る、また国家の健全さを判断する基準となっています。それでは、とリンカーンは口にしていません。正当な立場で、国家というこの叙事詩をあらためて織りなそうではないか。それがここペンシルヴァニアの戦野に横たわる死者に名誉を与える最善の方法だ、と。

「終焉？」

デニス・ヘイは印刷文化の生き残りそのものについて、PMMの序論とでもすべき小論文（訳注：「光あれ」）の末文でこう推測していました。最初にこの文化の脅威となったのは、さして新しくもない工業技術、つまりラジオでした。「むろんラジオが書籍の世界に」とヘイは記しています。「とってかわるかもしれないことは想像できた」。ヘイは西洋文化が完全に記述するのを止めることになり、ただ口頭で伝えるのみの段階にもどることになる可能性を想像さえしました。それだけでなく、他にも印刷文化に脅威を与えていた傾向はあったようです。「どの科学分野にも進歩がみられたことは、ある本が科学分野全体を主題として扱った場合、印刷されるとその時点で時代おくれになっていることを意味している」。1960年代半ばでは、学術雑誌向け印刷に何がとってかわれるかは、まったく明らかになっていませんでした。といっても、ヘイのメッセージは、ためになるこんな注意と同じです。「われわれは印刷が永続することを与件とす

べきではない。」

PMMの刊行を祝福する一編なのにこんな気難しい注意で話を終えていたら、せいぜい風変わりな一編ととられるのが関の山ですから、ヘイはいかなる類の放送であれ将来、印刷にとってかわることはないようだ」と結論しました。放送は単にあまりにもはかなく消え去るし、あまりにも不安定だということです。ヘイは慎重だが確固とした楽観論で言い添えています。「ことによると、いつかは過去にあわただしく飛びかった言葉と映像をとらえなおす方法を考案できるかもしれない。それが起きるまでは、印刷を代替するものは、印刷を代替するものはないはずだし、書籍なるものすべてが、ある時代が別の時代に語りかける唯一の手段でありつづけるはずだ」。

それから50年して、事実上他の別の方法が発見されました。今ではさまざまな目的、訓練、職業のために、印刷にかわるものが一つあります。電子コミュニケーションです。われわれは過去20年来、印刷文化より広範な人間のコミュニケーションの世界の枠内での印刷文化の主要な再配置を一つ目撃してきました。この発展しながらつづいている印刷文化再配置の速度、規模には息をのみます。この再配置が影響しなかったものは皆無です。科学、医学、工学、法分野、さらにビジネス分野でさえも、知識・情報の流通・交換の支配的な媒体は電子的媒体です。参考文献の照会、参照作業用の、またデータ・セット用の支配的な媒体は電子媒体です。またニュース報道と見解披瀝用の支配的な媒体も電子媒体化の一途をたどっています。音楽、ビデオ、静止画像も大規模に電子フォーマットに移行しました。しかも、われわれは依然としてこの新しい、ポスト・グーテンベルクとでもいうべき時代のはじめに位置しているかに映ります。

印刷なしのポスト・グーテンベルクという一時代は到来しないはずですが、手稿や自筆書簡がグーテンベルク時代をとおして生きつづけ、多用された事実とちょうど同じように、印刷した語もこれから長く生き残ることになります。ただし、印刷は再配置されており、印刷に特殊な機能・任務をうけてもっているし、これからはますますそうなるでしょう。印刷は将来ますます、包括的な通信様式というよりもむしろ、すき間をうめるコミュニケーション様式になりますし、すき間を埋める一様式としてわれわれとともに長い間ありつづけるはずですが。

(訳注：PPM中の固有名詞の訳語はすべて 『西洋をきずいた書物』西洋書誌研究会訳、雄松堂書店 1977年 に拠る。)